

経済教育学会

いま経済学と経済学教育に必要されているものはなにか

塩沢由典(元大阪市立大・前中央大)
y@shiozawa.net (@は半角に)

『経済学と経済教育の未来』(桜井書店、2015)第4章「競合するパラダイムという視点」に書けなかったことだけ書いておきたい。

わたしがいまいちばん危機感をもっているのは、大学院教育のことである。しかし、本学会には、高校教員のほか小中学校の教員までいると聞く。大学教育以前の経済学教育についてもひとこと触れておきたい。教育現場の実情を知らない人間の妄言とお聞き流されば結構である。

1. 高校までの経済学教育

いろいろ努力されてことを棚にあげて簡単にいえば、高校までの経済学では、理論はいらない。必要なのは、経済に興味を持ってもらうことだ。そのためには、経済の現状と経済史が重要だと思う。毎週おこる経済事件・経済問題についてでもいいし、最近は変化の目覚しいグローバル経済史でもよい。生徒にすこし意外なことを教えて、経済ってあんがいおもしろいと思ってくれれば大成功である。じつはこれは、中央大学で一年生向けの講義(経済学1・2)を担当していたときに、わたしも目指していたことだ。春学期は、経済に興味を持ってもらうことに専念していた。大成功とはいえないが、いちおうの成果はだせたと思う。大学院にまで行って経済学を専門に学ぼうと思う学生も何人か出せた。

もちろん義務教育ではそう自由は利かないだろうし、高校でも大学受験というくびきから抜け出すことは難しい。制約の中でできるかぎりをやってもらえればよい。もうひとつ御願したいのは、クラスでの授業とは別に、興味のある生徒には、こういう本があるとか、こういう考え方があるとか、すこし高度な指導をしてもらいたい。そのような生徒のなかから偉大な経済学者が育つかも说不定。

2. なぜ大学院を問題とするか

大学院教育についても、いくつもの課題があるが、社会人教育の必要とか、高学歴ワーキングプアとかについては、過去に書いたことがあるのでここでは触れない。参考に挙げたものはいずれも短いもので、WEB上で読むことができる。文部省が国立大学文系学部に改組を迫っていることにも触れない。

『経済学と経済教育の未来』では、イノベーションあるいはブレークスルーを起こしうる人材が絶対的に必要とされていること、そのために経済学はあんがい役立つかもしれない

い、ということを書いた。しかし、高校で経済学教育が十分できないように、大学の経済学部でも経済学教育は容易ではない。経済の現状について分析し考えるための基礎ができたといえる卒業生はわずかであろう。キャッチアップ期で欧米の先進事例を真似ていけば良い時代にはそれでやっていけた。それでは立ち行かないことは、もう 20 年以上日本経済が停滞していることが証明している。だからもういちだん高度な教育が必要である。

さきごろ東芝という歴史も栄誉もある会社に粉飾決算という不祥事が発生した。「なんとかしろ」と命令することが社長の仕事であるに다가誤認していた節がある。こんな社長が生まれるのは、いまだキャッチアップ型の会社があることを示しているが、当人たちはその点に気づいてもない。社内教育でじゅうぶん思っているからこういうことになる。

学士教育では困難だが大学院教育でできること、それは新しい概念体系の構築である。こういう能力を自己教育や現場教育で身に付けることは難しい。

3. なにが問題か

イノベーションやブレークスルーを起こすような人材は 100 人に 1 人もいればよい。そのような人材は、放っておいても出てくると考えることもできる。しかし、イノベーションやブレークスルーには運・不運もあるから、教育としては 100 人に数人程度は確保しなければならない。それだけの数を用意するだけの大学院教育が必要だ。現状では、そのようなコンセプトで動いている日本の文系大学院は存在しない。あるのは教員(研究者)養成大学院だけだ。新しい大学院を作ろうという努力もあまり見られない。

高学歴ワーキングプア問題もあり、優秀な人材が大学院に優秀な人材が集まらないという問題もある。しかし、一番の問題は、(文系)博士学位をもつような人材が自社にも必要だと経営者が認識することだ。現在の経営者の多くは、そういう経歴は持たず、自分の経験から学士以上の教育は不必要だと思っている。その現状が続くかぎり、日本経済も大学院教育も停滞を繰り返すだけだろう。

4. 具体化するには

企業の部課長級に経済学関係学会として、現状を説明し改善の必要を訴えるシンポジウムなどを開催したらどうだろうか。経済学会連合会でなどことを大きせず、まずは経済教育学会がイニシアティブをとればよい。これもブレークスルーに挑戦する一つであり、そのような精神は経済学教育にも求められている。

参考

塩沢由典「高学歴ワーキングプア」『京都大学新聞』2008.12.16.

<http://www.kyoto-up.org/archives/594>

塩沢由典「いま、なぜ社会人大学院か」『読売新聞』大阪版、2003年2月23日.

<http://www.shiozawa.net/ronsetsu/yomiuri30223.html>